

## 【資料紹介】

## 対馬藩士大石氏の家譜二種

徳 竹 由 明

## 一、はじめに

対馬藩はその初代藩主宗義智が、豊臣秀吉の朝鮮侵略に際して朝鮮半島に出兵し、特に初度の文禄の役では小西行長を主将とする第一陣に属して平壤にまで進出する等奮闘したためか、藩士の家譜類には文禄の役に関する記述を有するものが少なからず存する。<sup>①</sup> そうした対馬藩士の家譜の中でも、大石氏の家譜に関しては、主将である大石荒川介智久が弟の源左衛門智正と共に藩士の中でも抜群の武勲を上げた上に、虎狩りでも手柄を立てて義智より感状を二通受けていてその事績が興味深い。また本誌五七巻第二号にて「大石氏家譜」断簡を紹介した事もある。<sup>②</sup> そこで断簡の他に閲覧・調査することのできた大石氏の家譜二種類を、さらにここに紹介したい。

## 二、上県町中山大石家文書所収「大石氏系図」について

対馬の北部・上県の中山（深山・仁田内の西に位置する。「津島紀事」に依れば、近世には佐護郷仁田内村の内）<sup>3</sup>の大石家に伝来してきた大石家文書中には、「大石氏系図」一巻が伝わる。残念ながら実見に及んでいないが、一九六七年八月に長崎県立長崎図書館が調査・撮影を実施し、翌年二月に紙焼き写真を編集して冊子にしたもの（対馬の古文書<sup>7</sup>）が現在長崎歴史文化博物館に存し、それを閲覧させて頂いた。<sup>4</sup>この家譜には、旧稿で紹介した大石智久の事績が簡単に記されている他、その弟の智止の事績も簡単に記されていて興味深い。以下に、わかる範囲で書誌を記す。

函架番号・一三 一四三 一七（『対馬の古文書』七 大石家（中山） 上県町中山・大石豎矢氏所蔵 文書の内）

形態・写本。「継紙」カ。一巻。

写年・「近世後期」カ。

寸法・不明。

目録題・系図。

外題・一紙目端裏に「系圖 一巻 大石氏」と墨書。

内題・一紙目一行目に「系圖」と墨書。

料紙・不明（「楮紙」カ）。

行数・全体で三十五行。

紙数・不明（二紙一カ）。

印記・なし。

奥書・なし。

その他・なし。

なお形態・紙数について、「〔継紙〕カ」、「〔二紙〕カ」とした根拠は、写真を見る限り二十二行目「大石源左衛門正光」の箇所に濃い線が移っており、それを継ぎ目と判断したためである。また写真で見る限り最終行は料紙端ぎりぎりに書かれている。恐らくは切断や別紙の剥落があるのであろう。また料紙を「楮紙一カ」としたのは、端裏書が透けて見えているためである。なお氏名と一部の戒名はやや大きめの字で書かれている。続いて翻刻を以下に提示する。翻刻に際しては、適宜読点を補った。

（一紙目端裏書）

系圖 一卷 大石氏

（表）

系圖

大石瀧之助調信

大石荒川智久 文禄元壬辰朝鮮御陣、

義智公副將軍、貳拾

タフノ内、荒川上下三十三人、タカノ羽違ノ紋旗幕、

大石タフニ而御供仕ル、陣中手柄多シ、弟源太郎兄弟虎ヲ生捕ニスル、慶長三坂陣、

#### 大石源左衛門智止

調信ノ二男、冠者名源太郎ト云、兄智久タフ之内ニテ朝鮮御陣ニ渡ル、兄弟シテ虎ヲ生捕ニスル、其外陣中手柄多シ、兄ト同前ニ坂陣、知行拜領シ別家ト成シタモフ、慶長十三年八月廿四日卒スル、  
戒名

#### 大勇智石居士

#### 大石源左衛門智常

智正嫡、冠者名左市ト云、寛永十四、肥前國天草陣杉村采女嶋雄八左卫門御渡リ、爲與力佐護ヨリ智常一人、豆酩郷ヨリ大田養右衛門渡ル、同十五年五月坂陣ス、元禄十五十二月二日卒ス、  
戒名

#### 心峰全照居士

#### 大石源左衛門正光

智常嫡、享保十六亥十一月十日卒、八十七才、戒名

聖梁方元棟居士

大石源内正次

正光嫡、明和六年己丑十二月五日卒、歳九十五才、

戒名 聖然無廓居士

大石源左衛門正房

正光嫡、寛政元酉十二月廿八日卒、戒名

本翁智寛居士

大石大助 正房嫡、文化三丙寅九月廿一日卒、戒名

歎翁良善居士

大石源内正護

大助嫡、文化十三丙子年、御馬廻格二復<sup>御身</sup>

この系図は荒川介智久・源左衛門智正兄弟の父、大石瀧之助調信から書き記す。詳細は旧稿にて論じたが、この系図同様に智久・智正の父を「瀧之助調信」とするものは、『津島紀事』・『郷土資料 對馬人物志』の二書である。杉村采女本「大石系図」では智久・智正の父を「又三郎」とする。杉村采女本「大石系図」は智正の子を「源内助」と記し、仮名ではあるがやはりこの系図とは異なっている。この系図は、文禄慶長の役で兄智久と共に活躍した智正が、帰国後「知行拜領シ別家ト成シタモフ」と分家をしたこと、その嫡男智常が、佐護より天草島原の乱に出陣したこと等を記す。構成としては、分家の家祖である智正が文禄慶長の役で、著名な兄智久と同等の活躍をしたと主張しているようにも見える。

中山の存する旧佐護郷は、智久が一五九六（慶長元）年三月に佐護湊を拝領し、さらに一六〇一（慶長六）年九月には佐護郡代に任じられる等<sup>6</sup>大石氏にとって縁の深い土地であった。旧稿でも掲げた成立年次未詳の『対馬藩分限帳』によれば、佐護郷深山村に「大石與八・大石才右衛門」、同郷仁田内村に「大石萬吉・大石左傳・大石九左衛門（以上馬廻格）・大石作次郎・大石又右衛門・大石喜左衛門・大石瀨兵衛」の名が見えるが、この系図に合致する仮名は見えない（同書の御馬廻格「萬吉」の項の注記に「文化九年九月十五日、先年の減知行四分一御返し被下、如此」とあるのだが、それがこの系図末尾の「源内正護」項の「御馬廻格二復」とあるのと同じようなところがあるのか気になる所ではあるが）。ただとにかくこの系図は智正の子孫について記すので、中山の大石家はこの系図が存することから智正の子孫ということになるのである（なお『対馬の古文書』七の中には「大石家（深山）文書」も存する。この深山の大石家と中山の大石家の関係は不明である）。なお余談ではあるが、中山は智久所縁の「砥石仏」なるものが現存することである。<sup>8</sup>

### 三、宗家文庫蔵『大石氏家譜』について

続いて宗家文庫蔵『大石氏家譜』を紹介する。こちらは下県の旧佐須郷今里村の大石氏の家譜である。まずは以下に書誌を簡単に記す。

函架番号・宗家文庫 / 「記録類」・その他参考資料 / E / 一〇九。

形態・写本。仮綴。一冊。

写年及び筆写者・明治初期。大石阿吉郎久道。

寸法・縦二四・三糎×横一六・二糎。

表紙・原裝共紙表紙。

目録題・家譜（大石氏）。

外題・表表紙中央に「家譜」と墨書。

内題・一丁表一行目に「大石氏系圖」と墨書。

料紙・楮紙。

行数・每半葉九行。

墨付丁数・共紙表紙含め九丁。

印記・なし。

奥書・なし。

その他・表表紙右下に宗家文庫の蔵書票（縦四・四糎×横三・五糎）貼付（いずれも横書きで「宗家文庫／記録類 / その他参考資料／109／昭和63年度／平成元年度調査」と記載）。現況は、薄黄色中性紙封筒（縦三三・三糎×横二四・〇糎の角型一号。封筒表右下に鉛筆の横書きで「記4／Eその他参考資料／109」と記載）に入れて保管。

続いて以下に同書の翻刻を提示する。

家譜

今里村士族

大石阿吉郎

(二丁才)

大石氏系圖

惟宗右衛門三郎

(二丁裏)

文永十一年甲戌十月十五日於「小茂田濱」与「蒙古」

戦死<sup>テ</sup>本<sup>ト</sup>佐須郡代

惟宗兵部安盛

宗隠岐守武盛

(二丁表)

宗治部少輔茂幸



宗彦九郎茂高

宗左衛門佐茂元

宗修理亮盛成

永享十二年八月四日貞盛公判書有

宗佐次介 — 宗荒川

宗彦五郎 佐護<sub>ニ</sub>住

宗又六

文明二年卯月五日貞国公判書有

宗中務丞

文明三年二月十七日織盛公判書有

宗隼人佐秀郷

初又八<sub>ノ</sub>云文明七年九月二日宗出羽守

貞秀判書有

宗次郎助

(二丁裏)

(三丁表)

宗隼人佐勝家

延徳二年十一月十五日茂勝判書有

宗修理亮盛近

初又六<sub>下</sub>云明應五年十一月三日材盛公判書有

大石治部少輔勝種

享祿元年十月十日於池城有戦功

大石又六康滿

天文廿年十一月廿日晴康公判書有

永祿十年八月十九日茂尚公判書有

大石小六勝種

大石治部丞親綱

初小六<sub>下</sub>云元龜四年八月十九日調勝公判書有

(四丁表)

(三丁裏)

「大石藏人助景高

初又六<sub>ト</sub>云天正十二年八月廿一日昭景公  
判書有

大石右衛門佐須久

初源六信光<sub>ト</sub>云

元龜四年八月十九日貞信公判書有

天正十六年七月廿日義智公判書有

大石源左衛門智滿

初源次<sub>ト</sub>云三月十三日義智公判書有

大石源内助智房

初源六智勝<sub>ト</sub>云市松氏云

慶長四年八月十四日義智公判書有

同十三年十二月廿六日同君判書有

大石阿吉郎

文祿二年癸巳正月七日朝鮮ノ平壤城ニテ打死  
年十八歳

(四丁裏)

(五丁表)

大石修理

齋藤氏<sub>ヨリ</sub> 養子<sub>ニ</sub> 来<sub>ル</sub> 實<sub>ハ</sub> 治部少輔勝種

次男有故而如此

大石次郎兵衛

初次郎助<sub>ト</sub> 云正保四年九月廿三日義成公判書有

鈴木格左衛門 鈴木氏<sub>ニ</sub> 養子<sub>ニ</sub> 行

大石庄右衛門

貞享五戊辰年正月元日義真公判書有

大石一郎左衛門

後六郎左衛門<sub>ト</sub> 成

元禄十五壬午年十一月九日義方公判書有

女子 齋藤多兵衛妻

大石庄左衛門

(六丁表)

(五丁裏)

享保七壬寅年六月三日方誠公判書有

大石治部之助

享保十八年癸丑年九月十五日義如公判書有

寶曆二壬申年十一月十五日義蕃公判書有

大石定之介

大石阿吉久常

寶曆十二壬午年九月十一日義暢公判書有

安永七戊戌年七月九日義功公判書有

女子 長瀬惣左衛門妻

大石庄右衛門

開<sup>キ</sup>地<sup>ヲ</sup>以給仕<sup>ス</sup>

女子 高松多内妻

大石八十介

大石治部久信

平間唯右衛門

(六丁裏)

(七丁表)

平間為右衛門養子<sub>ト</sub>成

大石又六久忠

女子 三浦内蔵允直見妻

大石修理久行

文化十四丁丑年七月十八日義質公判書有

女子 中庭彌次兵衛以道妻

島雄正作

初吉次郎<sub>ト</sub>云島雄寛兵衛養子<sub>ト</sub>成

(七丁裏)

女子 橋邊判右衛門妻

大石小六久徴

初愛輔氏瀧之介氏云

天保十己亥年七月廿三日義章公判書有

同十四癸卯年二月十五日義和公判書有

元治元甲子年十二月廿三日義達公判書有

一宮 應

(八丁表)

一宮幸右エ門養子

女子 岡村雄之助妻

大石阿吉郎久道

樋口 便

初繁次郎「云樋口邦衛為養子

(八丁裏)

女子

大石愼太郎

女子

(九丁表)

こちらの家譜は、かなり前の代から大石氏の系譜を叙述する。同様の系図としては、杉村采女本「大石氏系図」がある。両者を比較してみるといづれも「惟宗右衛門三郎」(杉浦采女本では名を「方信」と記す)を大石氏の祖とする。この家譜では惟宗右衛門三郎を蒙古襲来時に討死したとするが、『八幡愚童訓』甲本の対馬で討死した人物の中に似た名前の人物を見出し得ず、実在したかどうかは不明である(『宗氏家譜』等近世期の資料には名が見えるが)。両書とも、右衛門三郎より五代目を左衛門(佐)茂元とする。杉浦采女本ではその子が宗彦五

郎、さらにその子が宗彦五郎と宗修理之助で、以下の人名は省略されているがこの修理之助の子孫が今里大石氏であるとす。この家譜では茂元の子が宗彦五郎と宗修理之助で、やはり修理之助の子孫が今里大石氏となる。杉浦采女本では宗彦五郎が重なっている点になるが、両書は凡そ一致している。

さてこの家譜では、大石阿吉郎について「文禄二年癸巳正月七日朝鮮ノ平壤城ニテ打死ノ年十八歳」とし、次の大石修理について「齋藤氏ヨリ養子ニ来ル」と記す。大石阿吉郎が文禄の役の際の文禄二年一月七日に平壤城にて討死したことは、対馬藩主宗氏歴代の事績を藩儒陶山訥庵等が編年体で纏めた家譜、貞享三（一六八六）年三代藩主義真序の『宗氏家譜』巻二「義智君」項に、

七日、明兵圍平壤以三砲火箭攻之、……（中略）……平田宮内、大石阿吉、波多野主税、齋藤宮内、伊奈豊源内、江口左京、大浦味右衛門、早田忠左衛門、重田恕右衛門等力戦而戦死。

と記載されている。<sup>9)</sup>若くして討死し、恐らくはまだ継嗣がいなかったので修理が養子に迎えられたのであろう。この修理の九代後に、修理久行があり、一八一七（文化十四）年に判書を貰っている。『対馬藩分限帳』には、佐須郷今里村に佐須党御馬廻格として「大石修理」の名が見える。この系図の筆写者が今里村土族の大石阿吉郎久道であることを鑑みるに、久行が『対馬藩分限帳』記載の修理であろう。なお近世末から近代を生きたであろう大石久道が「阿吉郎」を称しているのは、幕末の殺伐とした雰囲気の中で、異国の地にまで出征した遠い祖先の武人に肖るうとしたのであろうか。



#### 四、近世期の大石氏について

最後に、近世期の大石氏について、前稿の執筆後に分かったことを記したい。まずは対馬藩士の中川延良が安政五（一八五八）年から安政七ノ万延元（一八六〇）年に書き記した聞書『楽郊紀聞』中の大石氏に関わる記事四か条を以下に引用する。<sup>10</sup>

・大石庄左衛門、其子孫右衛門、其子大八、其子郡左衛門、其子今養子庄左衛門、与頭手代を永く勤む。物堅き人の由也。若き人々御横目又は江戸行など頼に、庄左衛門答て、御番出仕間役勤などを精勤あるべし。さすれば御横目・江戸行等は強て頼むに及ぶまじと申せし由。又人によりて御番出仕など、不参がちの人は、大に叱りて受付ず。精勤の人には、兼々精勤故、此節は御横目・江戸等の御伺に上げ置たりなどいふ事も有。此言を聞けば、御約束の如くに、人々慥に思ひし事とぞ。先考御話。

頭書「堀江茗園云、此人与頭役所の旧記を部類を立て、抜書せし物を、今洪表紙と唱へて、人重宝がり候由。今の庄左衛門物語。予も其本は見たり」

・同人手代役の比、吾王父、御呼使ありければ、庄左衛門に参りて、如何なる御用か御考へはなしや。品により身分に応ぜぬ御用共に候はど、御断り申上べければ、名代を出し候はん事都合宜しかるべしと仰られけり。庄左衛門は弓射の師にて、常に往来し給ふ故、如此は被仰し也。庄左衛門聞て、如何成御用共心得ず。さりながら上より御呼なさるゝに、無病ならば自身罷出可申事也と答へたり。翌日御出勤ありしに、同役を被仰付し也。是を以、其人の平生を察すべし。同上。

・大石、同役は春田伴左衛門也。相互に同役の蔭にてなければ勤らずと申せしと也。春田は大石と違ひて、おどけ言など常にいふ人也。大石は御与頭より呼ばれるれば、少しにじり直りて、ハイと答へし人也とぞ。同上  
(巻三 二七・二八・二九)

・大石何某、伝左衛門先祖、三宅伴左衛門御国に有し時に射芸を学び、未学び畢らざる内に、三宅氏帰りし故其時迄迄学び得し丈を以て人に指南する事を許せし由。故に的前(然)の事のみにて、全くは備はらざる由也。其儘にて今に至る迄師弟相伝て、其派の流儀の様に成り居たるとの事なり。吉村内記・大石庄左衛門、其外此派の射流多しとぞ。○嘉永三庚戌三月十八日、戸田官之介話。○官之介、大石免許の人也。(巻三

一二五)

巻三の二七・二八・二九話は大石庄左衛門に関わる記事、一二五話は射流の指南であつたという大石何某の記事である。まず巻三第二七話の冒頭を見ると、大石庄左衛門の子孫が四代にわたり記載されている。前稿にて『対馬藩分限帳』の府内士の項に、御馬廻(上士)として「大石直右衛門」、俵取大小姓(中士)として「大石孫右衛門」、大小姓部屋棲として「大石大吉」の名が記載されていることを指摘したが、このうち「大石直右衛門」は大石家(智久の子孫)の嫡流であろう。また「孫右衛門」と「大吉」は庄左衛門の子孫であり且つ親子であることが判明した。さらに宗家文庫本『獲虎実録』を文政九(一八二六)年二月四日に書写した「大石郡左衛門明親」は「大吉」の子であり、養子として庄左衛門を迎えていたことも見えてきた。前稿では、郡左衛門明親自身、又はその周辺で大石氏の家譜の再編纂作業が行われていた可能性を提示したが、もしそれが事実であるならば、或いは養子に家を託すということが動機であつたのかもしれない。なお一二五話の傍線部によれば、「大石何某」の万延年間の子孫には「伝左衛門」なる人物がいたとのことであり、また「弓射の師」であつた庄

左衛門はこの「大石何某」の射流を習ったようである。

# 註

- (1) 例えば『内山氏家譜』（宗家文庫・追録四七・五五・二）、『平山家譜』（宗家文庫・追録四八・五）、『立石家譜併系図』（宗家文庫・追録四八・二三）、佐須奈村「武田家譜」（対馬の古文書）、『平山系図』（対馬の古文書）等。
- (2) 拙論「対馬藩士「大石氏家譜」の断簡を巡って」大石智久の文禄の役での武功譚・虎狩等」『（中京大学『文学部紀要』五七・二・二〇二三年三月）。なお智久の武功譚・虎狩や義智からの感状等についても、当該拙論を参照して頂きたい。なお当該拙論にて未確認であった藩儒陶山訥庵著の『考證録』に関しては、その後長崎歴史文化博物館蔵近世後期写本（二三K 五〇・二二）を閲覧し、大石智久宛の二通の感状が掲載されていることを確認した。また同じ陶山訥庵編・一六九九（元禄十一）年成立の地誌『津島紀略』巻四「事蹟・下」に大石智久の文禄元年四月二十七日・忠州、及び文禄二年正月七日・平壤での奮戦が記載されていることも追記しておく（『津島紀略』は、長崎歴史文化博物館蔵近世後期写本 藤仲郷書入本 にて確認した）。
- (3) 同書巻之四「佐護郷・仁田内村・地理」項による。なお『津島紀事』記載内容は鈴木棠三編・対馬叢書二（一九七二年十月 東京堂出版）により確認した。
- (4) 二〇二三年七月に、調査させていただいた。なお二〇二三年八月に、長崎県長崎市の長崎県立長崎図書館郷土資料センターにて伺ったところ、調査後中山の大石氏とは図書館としては連絡を取り合っており、現在系図の所在は不明との事である。
- (5) 確認は以下の通り。『津島紀事』注3前掲書、『郷土資料 対馬人物志』長崎県教育会对馬部会編・発行（一九一七年五月）、鈴木棠三編 対馬叢書第四集（一九七七年九月 村田書院）にて再刊、杉村采女本「大石系図」『大石武氏著・発行『島のご事探索（四）・伝説津島佐護郡』（二〇〇四年七月）五章「付録」。

- (6) 陶山訥庵著『考證録』記載の義智から智久宛の慶長元年三月二十四日付・慶長六年九月十五日付の感状による。なお両事蹟は、『大石氏家譜』断簡の他、『郷土資料 對馬人物志』、佐護郡代の件に関しては『宗氏家譜』巻二「義智君」項にも記載されている。『宗氏家譜』は、鈴木棠三編・對馬叢書第三集（一九七七年七月 村田書店）にて確認した。
- (7) 『對馬藩分限帳』は、中村正夫氏監修、安藤良俊氏・梅野初平氏編（一九九〇年九月 九州大学出版会刊）による。
- (8) 大石氏註5前掲書第二章「昔の佐護郡の村落」による。
- (9) 『宗氏家譜』の引用は註6前掲書による。
- (10) 『樂郊紀聞』の引用は、東洋文庫三〇七（一九七七年四月 平凡社）による。

# 【追記】

本稿を為すにあたり、貴重な文献の閲覧を御許可下さった長崎県對馬歴史資料センター・長崎歴史文化博物館、並びに中山大石家文書所収「大石氏系図」の本稿への引用について、ご相談させて頂いた長崎県立長崎図書館郷土資料センターに厚く御礼を申し上げる。本稿は科学研究費助成事業（基盤研究C・課題番号二一K〇〇三一六・研究課題「對馬に於ける文祿慶長の役言説の生成・変容とその背景」の成果の一部である。